

常温煙霧処理における施設内の拡散性③

—湿度条件—

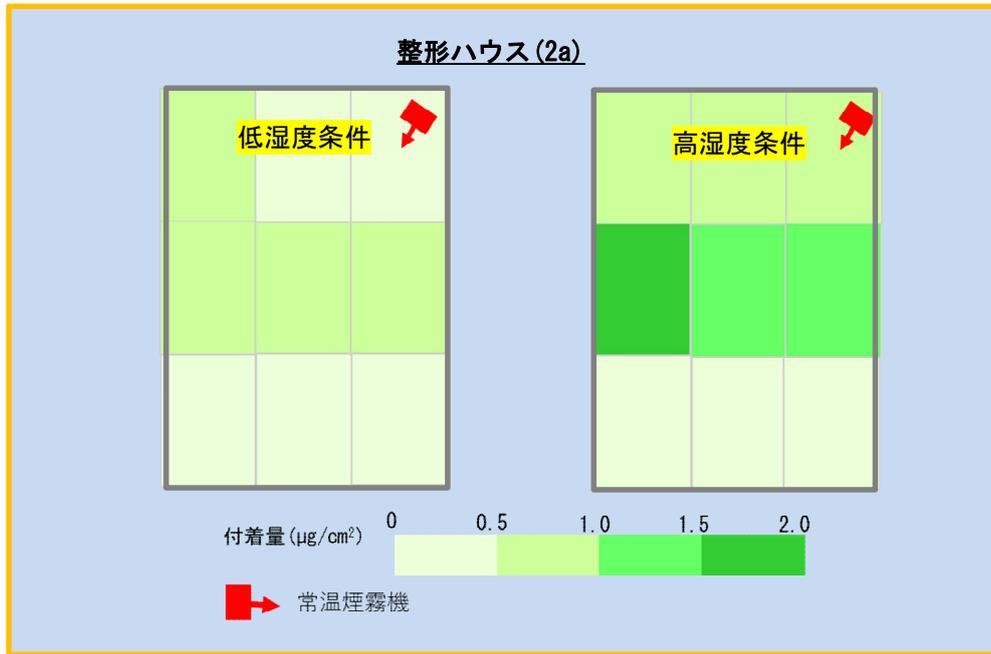


図1 湿度条件の違いと葉表の付着量

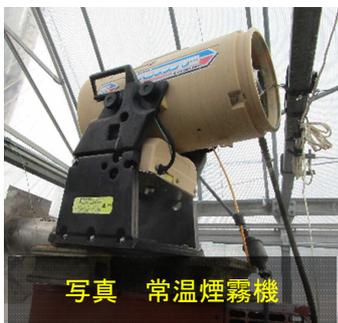


写真 常温煙霧機

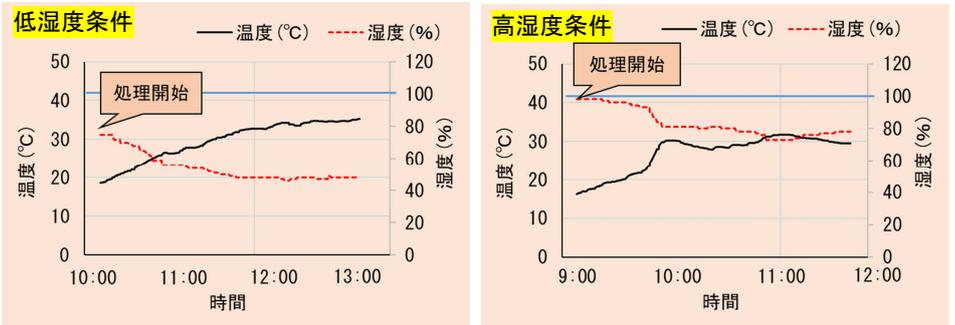


図2 各試験時の温湿度変化

常温煙霧法は専用の装置で農薬を約2.5 μmの超微粒子にしてハウス内空間を循環させる防除方法です。そのため、空気中の水分が多い状態、すなわち雨天時の高湿度条件下での拡散性が疑問視されていました。そこで、2aのピーマン栽培ハウスにおいてダコニール1000 (TPN40.0%含有、50倍希釈、10L/10a) を処理し、湿度とハウス内の拡散との関係を調査しました。

処理開始時の湿度は、低湿度条件では75%、高湿度条件では加湿器を用いて98%とした後、それぞれファン一体型常温煙霧機 (LVH-30CNH、写真) で薬剤を処理しました。なお、本試験では、循環扇を使用していま

せん。処理後、ハウス内9ヵ所に設置した葉に模したろ紙から葉表および葉裏へのTPN付着量を算出しました。

その結果、葉表の付着量は高湿度条件の方が低湿度条件より若干多くなる傾向があり (図1、2)、葉裏ではいずれも葉表の2割程度でした (データ省略)。また、設置場所から遠くなると付着量は低くなりましたが、湿度による差は認められませんでした。

以上より、湿度の違いにより若干拡散性が異なる傾向はありましたが、防除効果に影響を与えるような差で不具合はありませんでした。

(農薬管理担当 島本 文子 088-863-4915)